巻頭エッセイ

その先への一歩

一般財団法人民事法務協会 顧問　佐々木　暁

向こうの方から、赤や黄色の帽子を被った、よちよち歩きの保育園児が保育士さんに手を引かれて賑やかにやって来る。一歩一歩力強く元気いっぱいに、公園の遊び場目指して歩いている。保育士さんの手を振りほどいて、自分の力で歩こうとする元気な園児もいるがすぐ転んでしまう。自分の力で起き上がりまた一人で歩き出す。行きかう時に思わず声をかけたくなるが、保育士さんの強い視線に、悪いことをしていないのに、日頃の癖かつい伏し目がちになりながらも、心の中で「頑張れ、頑張れ」、「公園はもう少しだ」、「よいしょ、よいしょ」と声を掛けている。

今や重要な日課の一つとなっている、朝のウオーキング（老人の「お散歩」と言う影の声）の途中ののどかな風景である。

この幼児らの一歩一歩そして、その後ろを続いて歩いて来る小学生や中学生らの一歩一歩の力が間違いもなく将来に向けて踏み出す夢と希望の第一歩につながることになるであろう。

さてと、ところで、毎朝の私のお散歩の一歩一歩は、一体どこへ向かっている一歩であろうか。希望に向かって、力強い一歩であろうか。今や人生100年時代と言われてはいるが、満身創痍で、病床に臥しての100年はもちろん望むところではない。かと言って喜寿を過ぎた私には、これからの人生のさしたる目標もなく、どういう風にこれからの人生を歩めばよいのかと、つい弱気の虫が顔を出す。毎朝出会う保育園児のように、よちよち歩きでもいい、明日に希望を持って力強く踏み出す一歩がほしいと思う。

取り敢えず80歳まで、悪運よく90歳まで、運も尽きながらも100歳まで一体何を目標に、何にすがって生きていけばよいのだろうと毎朝思う。それにしても、腰が痛いし、足もしびれる。それなのに何で歩いているのだろうと、つい誰にとはなく文句を言いながらも今日一番の目標に向かって、一歩一歩力弱く歩く私である。年齢だけは、力強く確実に来たるべき時に向かって歩んでいる。

私にだって、あの保育園児らのように、将来に向かって、夢や希望を持って元気に歩いていた時もあったのだと、そして、それは今もなお続いているのだと思ってみても、夢も希望も生きがいも、そして、何より足がついていかない。やはり、老いの一歩なのか。団塊世代の根性・魂はどうしたのかと、自らを叱咤激励しながら、ようやく自宅に辿り着く毎日ではある。

作家の吉永みち子氏は、読売新聞「人生100年の歩き方」(作家の久田恵氏との対談)の中で、老いや残りの人生について、「最近は、朝目覚めると、「今日も生きている」

と思う。「だったら今日も生きるか。いつまでも命があると思うな、毎日を大事に生きよう」と、そして、「いつ何があるかわからない年齢になっている」（久田氏）と語っている。

吉永氏は、「子供達には、（自分が万が一の時には）延命措置は不要と伝えている。」、そして、「終末期に受けたい医療について、あらかじめ希望を書いたリビングウィル（事前指示書）をいつも持ち歩いている。」と、その内容は、「延命措置は拒否します。」、「苦痛を和らげるためにモルヒネを使って痛みをとってください。」、「植物状態に陥った時は延命措置は外してください。」、ということで、「家族が自分のために苦労することはつらいから」、と語っている。思わず同感ですと、新聞に向かって相槌を打つ。

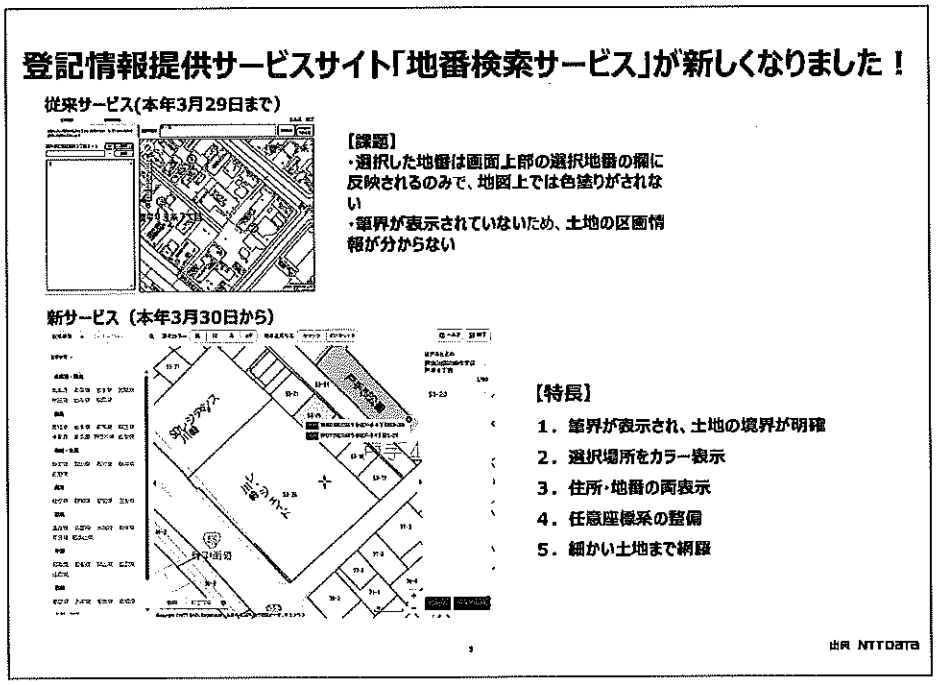
この対談記事の吉永氏の発言から思い起こしたのは、公証人拝命時代の公正証書の一文である。「尊厳死宣言公正証書」の重要な核心部分である第一条に、延命治療の差し控え、中止の宣言と併せて苦痛除去のための麻薬などの使用による死期の早まりの容認が記述されていた。公証人時代には、公正証書を作成する側の立場でしかこの問題の重要性を考えていなかったことに、年を重ねて身につまされる思いである。リビングウィルであれ、尊厳死宣言公正証書であれ、患者である当人の指示が尊重されるべきは当然であるが、法の整備が待たれている。こればかりは、遺言書では間に合わない。公証役場に走らなければ、と気持ちだけは走る。

さて、少し横道を歩いたようである。保育園児達に勇気をもらいながら今日も健康維持のためという取り敢えずの目標をもって歩いている私であるが、我が人生一体この先どこまで歩けばゴールとなるのか、どう歩けばよいのか、不安も一緒に歩いている。

団塊世代と言われる筆頭格として、戦後日本の経済復興の立役者ともてはやされ、まさに猪突猛進してきた猪年生まれは、今やその勢いも何処へやらで、今度は医療保険制度上の問題世代としてもてあまされている感がしないでもない。それじゃああと何歩歩いたら「ご苦労様でした」と誰かが言ってくれるのかと、かってに不機嫌になりながら、いつしか歩きが力強い。

元気な幼い保育園児の、明るい未来に向かって歩く姿に、嫉妬するかのように、ほぼ先の見えたわが身の歩く姿を重ねてしまった事を反省しながら、まだまだ私にだってこれからの私なりの歩き方があるんだと、心の中で己を鼓舞しながら、ゆっくりと一歩を踏み出した。まだまだ先は長いと心に秘めて。

昨年からよく耳にしてきた、「103（万円）の壁」とかいう言葉に、年金暮らしの今の我が身には直接的にはあまり反応することもなく、遠くの空を見上げながら、私にとっての「103歳」の壁はぼんやりでも存在するのだろうか、壁は厚いのだろうか、その遥か手前の「80歳の壁」までは取り敢えずながらも辿り着くことが出来るのだろうか、などと、すっかり冷めたコーヒーカップを片手に過ごしている自分にハッとして、読み始めて3頁も進んでいない時代小説に目を向ける日々のなんと多くなったことかと溜息をつく。

「古希」も「喜寿」も「傘寿」の年齢の人も今では珍しいことでもない。平均寿命が大きく伸びた現在、まだまだ次の壁に向かって、その年でなければ判らない、感じられない人生が待っているはずである。歩みはいつの日にかは止まる。高齢者はその

不安と自覚の中で、淡々とより力強く歩くしかない。時々は立ち止まって、神様、仏様に只々黙って手を合わせるのもいいでしょう。保育園児のよちよち歩きに近づきつつある自分を重ねながら、今日も元気に、加齢？否、華麗なるウオーキングに出発する毎日である。